
FULL POWER

TAKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FULL POWER

【Nコード】

N7191D

【作者名】

TAKU

【あらすじ】

能天気な淳史とそれに付き合う厚志。二人も大学三年生となり就職を考えなければならぬ時期に、能天気な淳史はいつもマイペースで就職にも我関せず。そんな淳史が自分のやりたいことを決めたかと思うと…

第一話

(ここでも動揺なしか…)

俺の隣にいるこの男はどんな時でも同様しているところを見たことが無い。運転している車が縁石に乗り上げている今も。

「ありやく乗っちゃった。」

「乗っちゃった。じゃねえよ！お前どうすんだよ！」

「まあ、父ちゃんの車だし何とかなるべ！」

「淳史もうちよつと慌てるよ！お前事故ったんだぞ！？」

でも淳史は慌てない。ただただ車の周りを回っているだけだ。

「そつだ厚志！写メ撮ってくんねえ？車と俺。」

こいつは馬鹿かとあきれた。

「いいけどお前この状況を何とかしろよ！」

「まあまあ写メ撮ったら父ちゃんに電話すつからよ。早く写メ！」

どうやったらかいつみたいに暢気に生きていけるのか教えてほしいぐらいに思った。

写メを撮り淳史に見せると満足げな顔をして見っていた。

「じゃあちよつと父ちゃんに電話するわ。」

そう言つて淳史はちよつと離れていった。

(21にもなつて親との会話聞かれないのか?)

と俺は不思議に感じながらも冬に近づいて来た11月の空の下で待っていた。

「父ちゃん迎え来てくれるってさ。」

「助かるわ。こんな田舎道で人1人通らねえからな、このままじや寒くてたまらん。」

何だかこの状況でそれほど慌てていない自分が不思議だった。淳史がいるからか?なんて思ったりもした。

淳史といるといつも何かアクシデントに襲われる。淳史は俺にとつてはトラブルメーカーだ。

そんなあいつと俺は大学の入学式で出会った。俺の隣にたまたまた来たのが“進藤淳史”だった。

「君はトイレ行つた?」

「はい?う…うん行つたけど。」

「このトイレの小便器低くない？俺半しゃがみ状態でしょんべんしてて辛かったわ。」

「は…はあ。」

これが淳史との最初の会話だった。普通だったら「君名前は？」とか「どこ出身？」とか最低でも「今日天気いいね。」ぐらいだろう。と感じていたのを覚えている。

「厚志！父ちゃん来たぞ！」

見ると向こうから黒い軽乗用車が来た。車など全くといっていいほど通っていない道だったの
ですぐにわかった。

淳史の父ちゃんは降りるやいなや

「おゝ結構大胆に乗ったな！」

「・・・」

この父ちゃんからあの能天気息子が生まれているのは当然だと思わざるを得なかった。

「こりゃあJAFだな。」

「ああJAFかあ！俺名前思い出そうとしたんだけど“JAL”しか頭に出てこなくてさ

あ。
」

「あはは！馬鹿だなお前！」

この親子の会話は何だか聞いてる方をぐったりさせる。

「お前なんでこんな何も無いところでこんなことになったんだ？」

「ちよつと対向車の車の助手席に可愛い子が乗っててさあ。見てたらこんななっちゃった。」

「そうかあ。対向車はカップルだったのか？」

「そうなんだよ！そこに腹がたつたよ！こっちは厚志と男二人で暇をもてあまして仕方なくド

ライブしてんのにあっちはカップルで楽しそうにドライブなんかしてんだよ！しかも男はブツ

サイクでさあ！なあ厚志。」

お前よりはイケメンだったと思ったが親の前ということもあり言うのをやめた。

「そうなんすよ！」

「そうかあ。そりゃあむかつくな！」

「だろ？」

この親子の能天気ぶりは素晴らしい。拍手を送りたいぐらいだ。

その後JAFが来て車を縁石からよけてくれた。タイヤを交換し動くことは動いたが念のため帰る途中のガソリンスタンドで車を預け点検してもらい、黒の軽自動車に三人乗って帰った。

「それにしても厚志君かつこ良くなったねえ。」

「いやいや、そんな事ないっすよ。」

友達の親との間でよく行われる会話だ。案外普通の会話もちゃんと出来るんだなと思った。

「でも厚志君って地方から出てきて一人で頑張ってえらいよな。ウチのこの“馬鹿”は実家でいつもゴロゴロだよ！」

「うるせえなあ。俺は実家が好きなんだよ！あんなに居心地のいいところねえもん。厚志は実家が嫌で出てきたんだよ！」

別に実家が嫌だったわけではなかったがそこまで実家に執着もしていなかったのになんともいえなかった。

しばらくすると一軒のラーメン屋に着いた。淳史の父ちゃんがおごってくれるというのでいた。食べている途中でもこの親子は会話が絶える事は無かった。

「ご馳走様です。」

「おう！厚志君が出世したら今度はおごってくれよ！」

「厚志は出世しねえから期待すんなよ。」

「いや、最低でもお前よりは出世する。」

「いやいや俺は日本を背負って立つ男だ！」

「あはは！お前が日本背負ったら日本は終わりだな！」

この親子の会話に啞然とする自分がいた。

俺と淳史は大学で経済を勉強している。しているというのは嘘かも知れない。ただ大学に行っているだけのような感じが強い。

淳史に入学式で初めて会ってから仲良くなるまではそう時間はかからなかった。

それは入学式が終わってすぐだった。

「君“あつし”君でしょ？」

「えっ？違うけど…。」

「嘘だ！だってさっき君の名前名簿で確認したよ？“進藤厚志”って書いてあったもん。」

「厚志って書いて“こうし”って読むんだよ。」

「なぐんだ。そっか。」

「君の名前は？」

「進藤淳史。だから名簿見たとき同じ名前だって思って興奮したのに。損した。」

（損させて悪かったな！）

こいつが最初に出て来た友達でそれ以来毎日一緒にいる仲だ。それから3年以上経った今日も一緒だ。

「次の講義なんだっけ？」

「淳史いい加減講義ぐらい覚えろよ。11月だぞ？」

「はいはいすいません。いいから教えろよ。」

「次は流通経済だよ。」

「あれかあ〜！うわ〜あの教授嫌なんだよなあ。」

確かに流通経済を担当していた教授は生徒の間で評判が良くない。

「ほら！講義始まるから行くぞ。」

「いつてらっしやい。」

「お前講義出ないの？」

「後で行くわ。」

こんなのも日常茶飯事だ。こう言っというて結局講義には来ない。

自分でもなんであいつと一緒にいるのかわからない。あそこまでマイペースというか能天気なやつと一緒にいると疲れる。しかしなぜか一緒にいる。おそらくどこかであいつといれば飽きないという気持ちがあったのだろう。

「じゃあ以上で今日の講義終わり。」

結局淳史は講義には出なかった。教室のドアから出ると窓から外のベンチで寝ている淳史の姿が見える。

何も言わずにその横に俺は座った。

「ん…んう…講義終わった？」

「うん。」

「そうか…講義出ようと思ったたら寝ちまった。後でノート貸して。」

「またかよ。今度は講義出るよ。」

「わかってるよ。」

空返事以外の何物でもなかった。

就職活動もボチボチ始まっていて、何もしてないこいつはちっちゃいながらも立派な雑貨屋の実家をこのままなんとなく卒業して継ぐんだろうと思っていた。

「お前就活しないの？」

「俺？わかんね。」

「お前いざとなれば家継げるもんな。」

「やだよあんなちっちゃい雑貨屋。」

「じゃあどうすんだよ。」

「だから、わかんね。」

普通の大学生なら就職は大きな目標であり、就職するために必死になる。なのに淳史はのんびりと今まで通り。こいつは不安とか焦りとか全く無いんだろうなと改めて思った。

ある日の夜中、俺は淳史に呼び出され近くの公園に向かった。淳史が改まって話があると言っ

てきたので眠る直前だった俺も何か雰囲気が違う事に気付いき素直に
応じた。

公園に着くとブランコが揺れていた。

(普通こんな深夜に一人でブランコで遊ぶかよ…)

「おう！厚志！」

「何だよこんな夜に。」

「いいから座れよ。」

まるで自分のブランコのような言い方だ。

「あんな…俺…野球するわ。」

「はあ？What？」

「だから野球するんだよ！」

「いやいや、意味わかんねえ。」

「今就活の時期だろ？俺はプロに行くんだよ！」

「・・・」

「聞いている？」

「聞いているっつーか、呆れてる。」

「俺本気だぞ？」

「話終わり？帰って寝たいんだけど。」

「まあ一応話したいことは話した。夜遅くに悪かったな。」

「全くだよ。じゃあな。」

俺はこんな夢の話に付き合わされてるのかと思ってあいつを心配した自分に腹が立った。

家に帰ってベットに入ると、淳史の話なんか気にもとめずに寝た。

次の日学校で淳史に会うと、いつも通りのあいつだった。やはり昨日のあの話はただの思いつきだったのかと何だか安心した。…と思ったら淳史の独り言が聞こえてきた。

「つーかさあ、どうやったらプロ野球選手なれんだろ？」

第二話

(こいつ本気か!?)

「なあ厚志、どうやったらプロになれんだ?」

「とりあえず野球しろ。」

「あはは!そうだよな!」

こいつは一体どこまで本気なのか…。こんな重要な時期にただおどけているだけなのか、それとも正真正銘の馬鹿か。

「厚志、一緒に野球しようぜ!」

「やだ。」

「何でだよ!いいじゃん。」

「俺は“本気”で就職活動が忙しいの。」

「俺だって本気だつーの。」

「はいはい。」

こいつはやっぱり家の雑貨屋を継ぐという道があるからこんな悠長にしてられるんだろ。俺もこいつみたいに楽しく生きれたらなんてちょっとすらやましく思いそうになった。

4月になり、周りでは内定をもらったやつもいればどうもうまくいかず厳しい顔をしたやつもいる。俺は後者だった。しかし淳史は以前と変わらずあの能天気のまま話しかけてくる。

「おい、厚志。」

「ん？」

「今日、ドライブ行こうぜ！」

「無理。」

「何でだよ！俺ら就活で大変だから息抜きだよ！」

（お前と一緒にするな。）

「とにかくそんな暇ねえんだよ。」

「いいから11時ごろ迎え行くからな！」

「迎え来ても行かねえよ。」

「何だよ厚志君…私のこと嫌いになったのね…。」

「何だお前そのキャラ。とにかく俺とお前は状況が違っわけ。」

「わかったよ！ノリわりーな！」

その夜、俺のアパートに訪問客が来た。いや、来やがった。

(ピンポン)

「おい！お前は完全に包囲されている！観念して出てきなさい！」

「お前来たんって言っただろ？」

「“来んな”っては言われてねえぞ。」

「お前なあ…。」

「まあまあ来ちゃったんだしいいじゃん。今日泊まってくぞ！」

こいつに関しては怒りを通り越して呆れに変わる。ただその夜は、俺がどんな企業を受けたか、どんな面接だったかなどを淳史が聞いてきた。特に誰にも自分の就活の話をする事も無かった俺は、それまでのモヤモヤした気持ちが少し晴れた気がした。

「眠い。やっぱり帰るわ。」

「うん。帰れ帰れ。」

「とか言っちゃって帰られたらホントは淋しいくせに。」

「はいはい。帰れ帰れ。」

「そこまで言うなら帰ってやるよ…！」

「じゃあな。」

結局淳史は俺の話を聞くだけ聞いて帰って行った。一体何がしたかったのか分からない。ただ暇だから来たのか、それとも少しでも就活に興味を持ったのか。まあどちらにしても話を聞いてもらえてすつきりした。

俺にも一社から内定が来た。5月も後半になっていた。第一希望の会社ではなかったがとりあえず今後の道が一本出来て安心した。

相変わらず敦史はあのままかと言つと少し違う。特別変わった訳ではないがどこかが違う。それを具体的に表現は出来ないがいつも一緒にいる俺が言うのだから間違いない。

「おまえ結局家継ぐの？」

「はあ？だからあんなちつちえ雑貨屋なんか継がねえっつーの。」

「じゃあ卒業したらプータローか。」

「俺は夢を追いかけて生きたいんだ。」

「なぐにカツコつけて言っただよ。」

「つーか俺がもしプータローになったとしてもその辺のプータローと一緒にされたくないね。」

ちゃんと就職している側の人間から見ればどんなプータローも同じだ。

「まず“プータロー”っていう言葉がよくないな。せめて俺には“ドリーマー”っていう言葉をつけてほしいね。」

「・・・」

「俺はドリーマーアンドフリーターだよ。“ドリフリ”だな。」

「聞いたことねーよ。」

「俺が作るんだよ。」

「まあ頑張れ。」

こいつが実際大学を卒業してドリフリとやらになったとしても周りからの目はただのフリーターだ。ただ敦史がどことなく元気がなくなっているのが気になる。以前の敦史なら自分の言葉を相手に押し付ける強さがあつた。しかし段々言葉の押しつけの強さがなくなつて来ているように感じた。

「なあ厚志、今日ドライブ行くか。」

「ああ、いいよ。」

「オツケー。じゃあまた後でメールするわ。」

「おう。」

敦史は目を追う毎に元気がなくなっている気がする。何故なのか今夜のドライブで聞いてみようとしていたときだった。

ピュピュッ

（おっ、敦史かな。）

ケータイをポケットから出して開けると知らない番号からの電話だった。この時期は就職の試験で受けた企業からの電話もあるので知らない番号からの電話も珍しくなかった。

「はい、もしもし。」

「厚志君か!？」

「はい。そうですけど・・・。」

「敦史の父ちゃんだけど、敦史が入院したんだよ!」

「えっ!？何ですか?」

「帰ってくる途中で倒れたらしいんだ。俺も今病院から呼び出しがあつて。」

「そうなんすか!どこの病院すか?」

「みなみ総合病院だ。」

「わかりました。俺も今から行きます！」

急な出来事で驚いたがとにかく急いだ。あいつが元気がないのは知っていたが倒れるとは思ってもいなかった。すぐに自転車に乗り精一杯漕いだ。

病院に着き敦史の部屋に入るとまた驚いた。

「おう！厚志君。」

「おう！厚志。どうしたそんな慌てて。」

「どうしたじゃねえよ。お前が倒れたっていうから飛ばして来たんだよ。」

「わりいな。とりあえず大丈夫だわ。」

「ごめんな厚志君、大丈夫だった。」

「いえ、よかったです。」

「やっぱお前俺が好きなんだな！こんなに慌てて来てくれるなんて。」

「普通慌てるだろ。」

「いやいや、俺だから慌てたんだな。」

「敦史、お前はいい友達を持ったな。」

「まあな。でも父ちゃんなんで厚志に連絡したんだよ。」

「いや、俺も慌ててな。とりあえず誰かに連絡しなきゃって思ってたな。」

「あはは、大丈夫だって。俺がそんな簡単にくたばる訳ねえだろ。」

「それもそうだな。あはは。」

「厚志君ちよつとジュース買いに行かないか？」

「はい。」

敦史の父ちゃんはそういつて俺を外に連れ出すと静かに話し始めた。

「厚志君は敦史の親友だよな？」

「はい。」

「あいつが就職活動をしていないのもわかるよね？」

「はい。雑貨屋を継ぐのかと思ってました。」

「そうか、実は俺が断ったんだ。ウチは継ぐなって。」

「どうしてです？」

「あいつは継ぎたいって言ったがそれはもう一つの選択肢が嫌だったからなんだ。」

「もう一つの選択肢？」

「そう、あいつは家を継ぐか、母親の会社で働くかの選択肢しかないんだ。」

「母親の会社って？」

「あいつが小さい頃に離婚してから母親は、企業を立ち上げたんだ。その会社が今じゃ大企業になった。」

「でもその選択肢しかないってどうゆうことですか？」

「実はアイツは生まれつき心臓に病気を持っていて移植するしか治す方法はないんだ。でもウチはちっちゃな雑貨屋でその金を出せない。だから俺が母親に頼んだんだ。敦史が大学卒業したらアメリカで移植させてやってってくれて。そしたら母親はウチの会社で敦史が働くなら出してやってもいいって。」

「何で敦史はいやがってるんですか？」

「アイツは母親が嫌いなんだ。母親が俺と別れてすぐ他の男と結婚したのが気に入らないらしいんだ。」

初めて聞いた敦史の家庭の事情に驚き、自分の中でうまく処理しきれていなかった。敦史は敦史なりに自分の今後を考えていたのを知った。

「その病気って、移植しないとどうなるんですか？」

「医者には25歳位まで移植しなければその後の命の保証はないっ

「言われたよ。」

「そうですか……。」

「厚志君、敦史がこれからどんな道を選んでもずっと親友でいてくれな。そろそろ病室に戻るか。」

病室ではまたあの能天気親子の姿があった。いつものように笑い、いつものようにふざけた事を言っている。

「じゃあ、そろそろ帰ります。」

「おい厚志、ありがとな!」

「おう。」

病院からの帰りも、アパートでも、布団のなかでも敦史の事を考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191d/>

FULL POWER

2010年10月11日01時44分発行